

ポール・ラッシュ博士記念奨学金を受給して

関 恒樹

私は、大学4年生であった1991年にポール・ラッシュ博士記念奨学金を受給した。この奨学金によって、日本に出稼ぎに来る外国人労働者の背景を探ることを目的としたフィリピンへのスタディーツアーの企画、実行、そして帰国後のツアー報告として写真展や講演会の開催が可能になった。活動の詳細に関しては、20年以上も昔のことであり、かなり記憶があやふやなところもあるが、思い出せる範囲で振り返ってみたい。

私が文学部史学科に入学したのは1987年のことであった。時はバブル経済絶頂期。当時首都圏の大学はしばしば「アミューズメント・パーク」と揶揄され、立教大学のキャンパスも、カラフルでオシャレなテニスや、スキー系サークルの学生で溢れかえっていた。しかし、そのような華やかなキャンパス生活とは対照的な世界があった。それは、バブルで膨らんだ日本の円を求めて、アジア各地からやってきた出稼ぎ労働者たちの存在であった。日雇いの肉体労働や水商売などで働く、彼/彼女らの過酷な労働環境は、次第に社会問題としてクローズアップされつつあった。一方で、そのような労働者達の背景としてのアジア諸国の貧困が、日本の繁栄と密接に結びついているといった言論が広く聞かれるようになり、日本のODA批判が盛んになり、鶴見良行による『バナナと日本人』（岩波新書、1982）が売れたのもこの頃であった。

そのような中、私は、アジア各地からの労働者たちの出稼ぎの背景を自分の目で見たいという思いを抱きながら、友人と共にフィリピンへのスタディーツアーを計画した。ツアーには、同じような興味を抱く学生10名程が参加した。ツアーでは、日本への出稼ぎ者を多く送り出している、マニラのスラムを訪問し、2泊3日ほどホームステイをした。そこでは、夫(父親)や妻(母親)が長期間海外に出稼ぎに行っている間に、家族の間に不信や摩擦軋轢が生じ、中には離婚や子どもの非行、家族崩壊などのケースもあることを住民たち自身の語りから知ることが出来た。また当時は、湾岸戦争勃発直後でもあり、中東に出稼ぎしていた多くのフィリピン人たちが、被害を受ける現状も目の当たりにした。さらに、フィリピン西部のパラワン島に移動し、農漁村部の貧困の状況、そこから海外へ出稼ぎに出る人々の生活の様子などを、やはり数日間のホームステイを通して学ぶ機会を得た。帰国後には、スタディーツアーで回った場所の写真とその説明を5号館のロビーにて展示し、より多くの学生と経験の共有を試みた。また、首都圏での外国人労働者支援に取り組むNGOスタッフを招き、チャペルで講演会を開催した。

その後私は、スタディーツアーで自分が体験したこと、観察したことをより広い視点から考えてみたいと思い、大学院に進学し、文化人類学を専攻することになった。現在は、広島大学に奉職し、20年前の自分と同じような関心を抱く学生たちを連れて、毎年夏にはフィリピンのスラムや農漁村を回るスタディーツアーを行っている。立場は変わっても、20年前とあまり変わらないことを懲りもせずにやっており、全く成長のない自分に啞然とすることもある。しかし、様々な社会問題を理解する際に、具体的な人々との小さな出会いや対話に根差しつつ考えるアプローチは、現在の大学での教育研究にもつながっている。このような「他者との出会い」こそが、ポールラッシュ奨学金の意図なのではないかとも思っている。

(2002年立教大学大学院文学研究科修了 広島大学大学院国際協力研究科准教授)